

年取った人間は、自己の状況を内面的に把握し、それに反応する主体でもある。

では、彼（彼女）はいかに彼（彼女）の老いを生きるか。

第五章 老いの発見と受容：身体の実験[書き抜き 331-374ページ] 333ページ/「老いはわれわれを不意に捉える」（ゲーテ）。「気がつくとおれは老いている」（アラゴン）[老いは突然気づかれる]

334/「老いの受容、老いをわが身に引き受けることが、とくに困難なのは、われわれがつねに老いを自分とは関係のない異質のものとみなしてきたからなのだ、――私はいぜんとして私自身であるのに、別の者となってしまったのか？」「老いという複雑な現実」「老いは、当人自身よりも周囲の人びとに、より明瞭にあらわれる。」「老いと「疾病」の混同により、いずれかの無視が起こる。[私は老いていない、病気ののだ。私は病気ではない、老いだけなのだ。]と。

336/病気と気づかず、老いによるもの、と考える。諦めの態度が、過度の心配よりもはるかに多い。自分が無益な存在であるという気持ち。「老いは正常に異常な状態なのである」「老人における正常は、同じ人間の壮年期においては欠陥とみなされたであろう」「健康への配慮を放棄するとき、彼らは老いのなかに定着するのである」「彼らは是が非でも自分を若いと考えたい。自分を年取っていると考えるよりは、むしろ健康が悪いと考えるほうを好むのだ。」

337/「人びとは年齢のせいにして病気という考えを払いのけ、病気のせいにして年齢を考えないようにする。彼らはこのごまかしによって、そのいずれをも真剣に考えないですますのである。」

338/が、急激な変化が平穏を破ることがある。「われわれの年齢についての啓示が他者たちによってもたされるのは当然である。」「もし、・・一瞬のうちに青年期から老衰期に移ったとすれば、・・・あなたは、他人にとってもあなた自身にとっても、あなたではなくなってしまうでしょう。その他人のほうもあなたにとっては同じ他人ではなくなってしまうでしょう・・・。」(339注)

340/「われわれは近親者を永遠の相の下に見ているので、彼らの老いを発見することもまたわれわれに衝撃をあたえる。」「なんとという光景だろう。自分もまたそれと同じ光景を他人に見せているわけなのだ!」

341/「時[の経過]がいわば肉眼に見えた、ということである。」「人びとに生じた変身によって、彼らのうえを通り過ぎた時間をはじめとめ、この時間はまた私のうえをも同じように通り過ぎたのだという啓示に愕然とした」

342/「われわれには自分自身の姿や年齢は見えないのだが、各自、あたかも眼の前の鏡に映る[自分の姿の]ように、他人の姿や年齢は見えるのであった。」「好むと好まざるにかかわらず、われわれは結局は他人の観点に降服する」

「われわれがいぜんとして自分自身であるというころのなかの確信と、われわれの変身という客観的に確実な事柄とのあいだには越えがたい矛盾が存在する。われわれはこの二つのあいだを往ったり来たりするだけで、両方をいっしょにしっかりと把握することはけっしてできないのである。」[四角くて丸い二つの影、吉田章宏]

老いは、「実感されえないもの」(サルトル)に属する。

344/「自己認知[あるいは同一化]の危機」「年取った人間は重大な肉体的変化を経験することなしに、他者をとおして自分を老人だと感じる。」「自分を見ることが不可能」「われわれの無意識は老いということを知らないのである。それは永遠の若さという幻影を育む。」この幻影が打撃を受け、自己愛に損傷を受け、鬱病的精神病をひき起こすことがある。

345 / 「人は早くから自分が老いていると公言することも、あるいはその逆に、最後まで自分は若いと思ひこむことも可能なのだ。この二つの選択は、それぞれ世界に対するわれわれの総括的な関係をあらわしている。」

346 / 「この自己盲目が可能なのは、すべて実感されえないものはこう断言するように人を仕向けるからである、『わたしは他の人たちと同じではない。』」

347 / ジッドの1930年の言葉、「わたくしはいま、わたしがわかかったころ非常に年寄に見えた人たちの年齢になっていると納得するには、たいへんな努力が要る。」 老いの「拒否はそれ自身、引き受けの一つの形式なのである」 老齡を根源的な失格と考えるある種の女性は、[老いを]拒否する。その服装、化粧、身のこなしなどによって他人を欺こうとする。

348 / 内心の確信と客観的な知識のあいだを往き来する動揺: ジッド「もしもわたしが自分の年齢を絶えず自分に言い聞かせていなければ、きっと自分の年齢など感じないだろう。」

349 / 「老役の仮装」役柄、衣装とかいう言葉を用いる。「一般には、人は不意を打たれて戸惑い、自分についての映像をふたたび見いだすには、他人を経なければならぬ。人は私をどうみるか？ 私はそれを鏡に尋ねる。答えは不確かである。」

「文学作品のなかでも、実人生においても、自分の老いを快く思う女性には私は一人も出会ったことがない。」

353 / ヴァレリー 「わたしはひげを剃る時以外は決して鏡を見ないことにしている」

354 / 「老齡の画家たちの自画像を考察するのは興味ぶかい。」 [幾つかの自画像をOHPで見た。]

355 / 「実感することのできない老いを生きなければならない」。身体において。

356 / 定年退職した人間、注意を自分の身体に向け、いろいろな病苦を訴える。社会的威信の喪失に由来する苦悩をごまかすために・・・。

老化現象のもっとも悲痛な点、「もう後戻りはできない、という感情である。病気なら癒るか、少なくともその進行を停止させる可能性がある。事故による不具も、とりかえしがつかず、一年毎にそれがひどくなることをわれわれは知っているのだ。この衰退は宿命的であり、誰もまぬがれることはできない。」

357 / ヴォルテールは「他人の観点を採用して」、「老いた病人」、「病める八十翁」と自称した。3

58 / 遺恨の感情によって、悪化させる者もいる。シャトーブリヤン

「老いに対する嫌悪から老いのなかへがむしやりに突進する態度」 (グリブイユ主義) 自分で自分を棄ててかえりみず、ちょっとした努力をも拒む。

敗北を肯じない者にとっては、「老齡であるということは老いと戦うこと」

359 / 「彼は助けを求めるのを躊躇し、結局、我慢してしまう。」

361 / もっとも幸福な年齢は、60歳から80歳、「もはや野心をもたず、何事も望まず、自分の蒔いた収穫物を享受する。それは刈り入れを終えた年齢である。」フォントネルの言葉 362 / 364 スイフトの間と人生への嫌悪、自分を愛していなかった。 364 / ホイトマン「他人の話にはよく耳を傾け、人びとは彼といっしょにいることを喜んだ」 367 / ゲーテ、かくしゃくたる若さ、が最晩年は居眠りしていた。トルストイ 旺盛な体力は伝説的であった / 努力と配慮の賜物 / 六七歳で彼は自転車に乗ることを習い・・・。

369 / ルノワール / 「画を描くのに手は必要ではない」 370 / パペーニ / 七〇歳のとき、「学びたい欲望、仕事をしたい欲望でいっぱいだ。」 / 371 / 「自分の仕事に打ち込んでいない場合でも、自尊心から老衰にたいして精力的に抵抗する者もいる」 / ヘミングウェイ『老人と海』 / 銃の一弾で自分の生命を絶った。 / 372 / 一個の人間であるということを他者たちにも自分自身にも証明したいと念願する。「精神と肉体とは緊密な相関関係にある。」

374 / 精神主義のこうしたちもない言説は、大多数の老人がおかれている現実の境涯を考えるならば、無礼というほかはない。その境涯とは、飢えと寒さと疾病であり、・・・。「老齡が肉欲からの解放をもた

らすという考えは、経験が教えるところと根本的に矛盾している。」

「うららかな老年」は、「各瞬間ごとの勝利、敗北の克服を意味する」

第六章 時間、活動、歴史 [書き抜き 427-452ページ]

427 / 「生きてあること [実存すること]、それは人間存在にとっては、己を時間化することである。すなわち、現在において、われわれはわれわれの過去を乗り越える投企によって未来を志向する。そしてこの過去のなかにながれわれのもろもろの活動は落ち込み、惰性態と化したもろもろの要求を背負ったまま、凝固する。」

「人は老人を次のように定義しうるだろう。自分の背後に長い人生をもち、前方にはきわめて限られた存続の希望しかもたない者である、と。」

[ここで、私たちは、時間、空間、他者と自己、身体、言語、映像・・・の相互関連からして、生きられた時間の性格が、それらすべての変化と相関している在り方を、可能な限り豊かに、想像してみなければならぬ。吉田章宏]

過去

428 / 「満足感をもって過去を想起するのはとくに年取った人びとである。『彼は希望よりも思い出によって生きる』ことにアリストテレスは留意した。」

「遠い昔の日々へのこの偏愛は大部分の老人に見られることであり、それはしばしば彼らの年齢がもっとも明瞭に看取される兆候でさえあるのだ。」

モリヤックの言葉「老人はたとえ幼少年期に戻りはしないとしても、彼はひそかにそこに立ち帰る。そして小声で、ママ、と呼ぶ喜びに身を任せる。」

「過去が生きているか否かを決定するのは未来である」(サルトルの言葉)。進歩することを投企(くわだて)としてもつ者は彼の過去から離れ去る。彼は彼のかつての自己を彼がもはやそうではない自己として規定し、それへの関心をなくす。その反対に、ある種の対自存在の投企(くわだて)は、時間の拒否と、過去との緊密な連帯とを必然的にふくむ。大部分の老人の場合がこれであり、彼らは失墜したくないので時間を拒否し、彼らのかつての自己を彼らがそうでありつつける自己として規定する。すなわち、彼らは彼らの青春との一致連帯を主張するのである。 内心では昔のままだという確信を持ちつつける。
/ ときには彼らは過去の自分のなかでもっとも誇りうる人物を現在の自分と同一視することを選ぶ。 例えば、勇敢な兵士、もてはやされた女性、讃歌すべき母親。

429 / 「世界がその相貌を彼らにあらわした時期、彼らが後にそうなったところの人間が形を定めた時期、すなわち幼少年期をふり返る。」 自分の歴史(みのうえ)を自分に物語ることをある程度まで可能にしてくれる。想起されるイメージには、「一種の本質的貧しさ」が存在する。 イメージは対象をその一般性において示すのだ。

431 / 「人は過去を推測するのだ。」(アンリ・ポアンカレの言葉)

しかし、正確なイメージもある。「私の子供時代の全時期を通じて、[女中の]ルーズ、私の父、私の祖父の顔は不変なのである。」

432 / こうした固定映像は変動する世界のなかで永続する。

「年月の経過のなかで、われわれにはつねに現在の時点が自然であるように思われる。」 「事實は、われわれが過去のイメージをふたたび見るとき、それらはすっかり古びて見える。かつてわれわれの人生は新しさであり、新鮮さであったのだが、そのみずみずしさまでも失われてしまったのだ。」

「過去がわれわれを感動させるのはそれが過ぎ去ったものであるからだ。しかしまたそれだからこそそれは実にしばしばわれわれを失望させもする。すなわち、われわれはそれを、未来へ向かって躍進していた現在、未来にみちた現在として生きたのであった。が、いまはその残骸しか残っていないのだ。これが、

思い出の土地へ再遊することをじつに空しいものとするゆえんである。」

時間はわれわれを裏切る。空間も、その固有の仕方でも、われわれを裏切る。

場所は変化する。たとえ外見上は昔と変わらない場所でも私にとっては昔のままではない。・・・かつての私の計画、欲望、不安などをふたたび見いだしはしないだろう、つまり、私は私をふたたび見いださないのである。

「過去における未来は、もはや未来でなくなったばかりでなく、それはしばしばわれわれの期待を裏切りながら現実化した。」

433/434 「私は一度ならず、けっして終わらないであろうと思われた友情の始まりを経験した。そのあるものは期待どおりになったが、なかには無関心あるいは敵意に変わったものさえある。あとで仲たがいとなることによって否定された親愛関係をどう解釈したらよいのだろうか？」[フッサールの『経験と判断』河出書房新社で展開されている「否定の意識」「懐疑の意識」などを参照] 過去の出来事の意味というものはつねに疑いをさしはさむ余地がある。

「われわれにとって大切な人の死は、われわれの過去との急激な断絶をもたらす。・・・老人とは、自分の背後に多くの死者をもつ者、なのだ。」 「近親者、友人たちの死」「われわれの人生のなかで彼らとのかかわりのあったすべての部分を奪い去るのである。われわれより年長の人たちの場合、彼らが彼らとともにもち去るのはわれわれ自身の過去なのだ。」 「六〇歳代の人間が、同じ世代の親戚や友人を失うとき、彼は彼自身について故人がもっていたイメージを失うので悲しむ。故人だけがある種の思い出を分けもっていた自分の幼少年時代あるいは青年時代が故人とともに葬り去られるのである。」「しかし老人たちに取り返しつかない悲嘆をあてるのは、彼らが自分の未来をその人間に結びつけていた、彼らより若い人間の死である。とくに彼らがその人間を産み、育て、あるいは形成した場合であり、子供、あるいは孫の死は、このうえもなく大切な事業の突然の崩壊を意味する。それまでその人間のためにしてきたあらゆる努力や犠牲、彼に寄せていた希望などが不条理にも空と化するのだ。」

435/ 同じ世代の友人の死。「私自身の人生の大きな部分が崩壊したのだった。」 「彼らはこのわれわれの過去を墓にもち去ってしまい、・・・」

「『死者たちの記念碑』、そのなかに葬られているのは私なのだ。」

過去が悦びの対象となることはないだろうか？

「彼は自分がサルトルであることを悦んで欲しかった。私はなんとまちがっていたことか！ 彼自身にとって彼は「サルトル」ではないのだ。」 「人は自分についてのイメージと戯れることはできても、それと同化することはできない、ということを示している。」 436/ 「アラゴンはあらゆる成功が含みもつ挫折について暗示した・・・」 「夢見られた夢と、実現した夢とのあいだには無限の距離がある。」

マルラメ「夢の収穫（とりいれ）が、夢を摘み取った人の心に、たとえ悔や幻滅がなくとも、残す悲哀の芳香」/ サルトル「未来は追いつかれえない、未来は、旧の未来として過去[のなかに]滑り去る・・・」

437/ 「真実は、過去のほうこそわれわれを捉えているということである。われわれは過去がわれわれをそうならしめたもの[現在の自分]をとおして、過去を認識するのだ。自分の現在の状態に不満な人間は過去のなかに、自分の怨念をかりたてるもの、現在をさらにいっそう歎かわしく思わせる理由、を見いだすだけである。」

フローバールの例「過去を現在と比較することによって、彼は自分が失墜した人間であると感じ、一方、この失墜の観念は彼の過去への執着によって強化されたのである。」 過去と現在との対照が耐え難いものとなることもある。[パスカルのパンセ「位を奪われた王でないかぎり、だれがいったい王でないことを不幸だと思うだろう」]

438/ 「老人にとり憑くのは、とくに彼の幼少年期である。フロイト以来――そしてモンテーニュはすでにそれを予感していたのだが――個人とその宇宙の形成にとって幼年期がいかに重要であるかは

人の知るところである。幼年期に受けた印象は強烈で、生涯ぬぐい去ることができない。成人は、それらの印象を想起する関がほとんどない、なぜなら彼は実生活での均衡をみいだすことに忙しいからだ。しかしこの緊張がゆるむとき、それはらふたび姿をあらわす。」

ノディエ「老いてゆく人間に自然があたえるもっとも甘美な恵みは、子供のころのいろいろな印象をきわめて容易に想起することができるとのことだ。」

439 / 「子供は人生について骨の折れる修行をする、彼はうち勝たねばならないさまざまなコンプレックスに悩まされる、彼は罪障感、恥ずかしさ、不安を感じる。こうした厭な思い出は壮年期においては抑圧されているが、老年になると甦ってくる。」

「幼少年期、初期青年期の内的葛藤が甦ってくる。」 アンデルセンの顕著な事例。

440 / 「老人性ノイローゼの源泉はすべて幼少年期か初期青年期にあるのである。」 なぜ、老人たちが幼少年期をふり返ることを好むか。「それは幼少年期が彼らを支配しているからだ。彼らが自分の幼少年期のなかに自分を認めるのは、・・・、それが一度として彼らの内部に住むことをやめなかったからである。」「別の理由がある、すなわち、実存は自己を超越することによって自らを基礎づける、ということである。しかるに――とくにひじょうな高齢に達すると――超越は死に突き当たる。それで老人は自分の生誕あるいはすくなくとも最初の数年間をふたたび自分のものとして身に引き受けることによって自分の実存を確立しようと試みるのだ。」

「幼少年期＝老年期は、社会的次元において認められるだけでなく、本人によって、内的経験として生きられる。」

441 / 年取った人びとが求めるのは、「自分の幼少年期について詳細で首尾一貫した物語をつくることではなく、ただそのなかにふたたび浸ることなのである。」 主題を反芻し、繰り返しにあきず、そこから新たな気力を得るのである。「彼らは現在から逃れて昔の幸福を夢想する、しかし、昔の不幸は払いのける。」 1) 自分の過去を、イメージや幻像や情緒的態度として内化する。2) 「過去こそが私の現在の状況を、そしてその未来への可能性を決定するのである。それは、私がそこから出発して自分を未来へ向かって投与する所与、そして私が実存するために超越すべき所与なのである。」 このことは、あらゆる年齢において真実である。「私の肉体のなかに形成された機構を、私が用いる文化的用具を、私の知識と無知を、他人との私の関係、私の仕事、私の義務を過去から受けている。」 「人間はすべて彼の実践によって世界〔外界〕のなかに彼の客体化を実現し、その〔客体化されたものの〕なかに自分を疎外する。彼はそこに自分の利害的関心物をつくりだす。」

442 / 「所有者の利害的関心物は彼の所有物であり、しばしば彼は彼の生命そのものより以上の価値をそれに付与する。」 老年には、一つの長い人生がそのときのわれわれの背後に凝固して存在し、われわれをしっかりと捉える。もろもろの「しなければならぬと考えること」は増大し、その裏側は数々の不可能事〔してはならないと考えて、できないこと〕である。たとえば、所有者は彼の所有物を保守しなければならぬので、それらを手放すことはできない、のだ。 老人は、彼の未来を前にして、がんじがらめに縛られている。未来は、彼にとって二重に有限である。短く、閉ざされている。短いがゆえにいつそう閉ざされており、閉ざされているがゆえにいつそう短く感じられるのである。[いわば、空間と時間の両方の次元において、有限である、ということ。]

未 来

442 / 「ある時期以後――それが何時であるかは個人によって差があるが――・・・彼に残された年月の数は限られている、と」自覚する。この猶予期間は彼には悲劇的に短く思われる。

「時間はわれわれの人生のさまざまな時期において同じようには流れないからだ。時間は人が年を取るにつれて急速に進むのである。」

443 / 「子供にとっては、時間は長く感じられる。彼がそのなかで動き回る時間は彼に課せられている。」

それは大人たちの時間である。彼はそれを計量する術も、予測する術も知らない。彼は始まりも終わりもない生成のさ中に埋没している。」

「子供のころは世界はじつに新しく、それがわれわれの内部に惹起する印象は実に新鮮で強烈であるので、時間をその内容の豊富さによって評価するならば、それは、習慣がわれわれを貧しくしてしまう年齢期に比べて、はるかに長く感じられる。」

ショウペンハウアーの言葉。「幼少年期のあいだは、・・・一日一日は際限もなく長い。」注**に、
ジョルジュ・コンダミナスの言葉。「旅行中の一日・・・」

444/イヨネスコの言葉「そして、来年とは言葉にすぎなかった。この来年なるものが来るだろうと考えたとしても、それはじつに遠い先のことと思われたので、それについて考える必要はなかった。それが現実にやってくるまでは、それは永遠とおなじくらい長く、それゆれけつて来ないのと同じだった。」

「幼少年期を過ぎると、空間はちぢまり、事物は小さくなり、肉体は力強くなり、注意力は確固とし、人は時計や暦の類になじみ、記憶は広さと正確さを獲得する。それでいて四季は依然として、すばらしいあるいはおそろべき緩慢さをもって回転しつづける。・・・私の足下に拮がった未来の広大さが私の心を高揚させた。あと、四〇年、六〇年も生きるのだ。それは永遠であった、なぜなら、ただの一年でさえ私にはあのように長く感じられたのだから。」

若いときから老年期までに時間に対する評価が変化する理由。 1) 「いかなる年齢にあろうとも、人は自分の全生涯を自己の背後に、同じ大きさに圧縮された形でもっている、ということ・・・」自然に心に浮かぶ印象。「1カ年がわれわれの年齢の5分の1であるときは、それが50分の1であるときに比べて10倍も長く感じられるだろう。」 2) 「若い人たちの場合、記憶は過ぎ去った1年を広大な空間にわたって展開された豊饒な細部とともに差し出す。彼らは来るべき年にも同じ[広大な]規模を想定する。これに反して、年を取るとわれわれに強い印象を与えるものはわずかしかない。刻々はわれわれにわずかしか新しいものをもたらさず、われわれは時々刻々に長くかかずらわない。」

445/3) 「私は1年後は、よくて今日と同じだろうということを知っている。これに反して20歳のときは、・・・、一年一年はわれわれを陶酔的なあるいは嫌悪すべき、新しい事物の旋風のなかに巻き込んで運び去り、われわれは変貌して出てくる。そして、近い未来にも類似の激動があるだろうと予感する。」

「人は外界への期待、自分自身への期待において存在するのだ。」

「幼少年代を喚起する情緒的な思い出があのように貴重であるのは、それらの思い出がごく短い瞬間ではあるが、われわれに涯しない未来をもう一度所有させてくれるからなのである。」子供のころ、「明日」は空虚な言葉にすぎず、私は永遠を所有する。「子供のころの時間の厚みをふたたび見いだすための最良の方法は旅行することだ、と」イヨネスコの考え。イヨネスコの言葉/445ページ。

446/「旅行の日々は思い出せば実に長いが、そのときは稲妻のように過ぎるのだ、なぜならわれわれは間断なく緊張していたからだ。」「老人の視点と小児あるいは青年の視点との根本的な相異は、老人は彼の有限性を発見したが、人生の初期においてはそれに気づかないという点にある。」この後、よい言葉が続く。(446ページ)/447/「ところが老人は、彼の人生はすでに出来上がっており、やり直しはできないことを知っている。未来はもはや多くの可能性でふくらんではおらず、それを生きるべき[彼という]有限の存在に比例して収縮してゆく。」二重の有限性。第一に、残された時間が有限である。第二に、「人間存在は、たとえ不死であっても、依然として、有限であるだろう。」(サルトル)。

「何ものも私を自分自身から脱け出させはしないだろう。」高齢期になると、この両方がいっしょに、そしてそれぞれ一方が他方によって、開示される。

「彼の余生は短く限られており、そして彼はけつて彼自身から逃れることはできないだろう。」

448/「成年期から高齢期にいたるまでに、未来は質的に変化するのだ。六五歳の人には四五歳のときより二〇歳多く年をとっているというだけではない。人は未確定の未来――彼はそれを無限なものと思

しがちであった――を有限の未来ととりかえたのである。かつてわれわれには地平線にいかなる限界も見えなかった、いまやわれわれは一つの限界を見るのである。」

「限られた未来、凝結した過去、これが年取った人びとの直面する状況なのである。」多くの場合、この状況は彼らの活動を無力化する。

4 4 8 / ミシェル・レーリスの言葉「何か仕事に着手しようという欲望さえ失うことがある。……。人はまだ自分の自由になるわずかの時間を計量する。それは狭く息苦しい時間であり、一つの仕事をのびのびと発展させるのに必要な期間が欠けているなどと考えることは問題外であった時期の時間とはまるで別のものだ。このことが、何かやろうという熱意を失わせる。」

4 4 9 / 彼はもはやなんら為すべきことが見当たらないか、あるいはそれを完遂するのに必要な時間がないと考えて事業を断念する。

過去に根ざす定言的命令がその力のすべてを保持している場合もある。そのとき、不安にみちた執拗さをもって、年老いた人間は彼に少しの休息も許さない時計に対して戦慄をひらく、「老いが近づいたときに、閑暇をたのしむ気持をまったく失ったことはわたしのもっとも苦しい経験であった」と、ベレンソン 70 歳のときの言葉。さらに苦しいのは、「依然として大切だと考えている目的を達成することができないことである。」

「われわれの投企（くわだて）が、われわれの死の彼方に位置する目標を目指すこともある。」

反復的社会、歴史が緩慢に進行する社会では、人は単に彼個人の未来だけでなく、世界の未来をも自由にしるのであり、彼はそこに彼の仕事の成果が残ることを予測する。その場合、80歳の人間も家を建てたり、さらに樹木を植えたりすることに喜びを感じる。」

4 5 0 / 息子が家業を継ぎ、孫がまた継ぐ、と期待することができた社会。

「彼がそのなかに自己を客体化した所有地あるいは企業は無限に存続すると思われた。彼はそのなかに死後も生きつづけ、彼の労苦も無駄ではなかった、と思われたのだ。」

今日では、年取った人間はもはやこの種の永遠無窮を当てにすることはできない。歴史の運行が急速化したのだ。人が昨日建てたものを歴史は明日破壊するであろう。老人が植える樹木は伐り倒されるであろう。……」

「彼が為し遂げたもの、彼の人生の意味を形造っていたものは、彼自身と同様、滅亡に瀕しているのだ。」

「多くの場合、父は息子のなかに自分を認めることができない。彼は完全に虚無に呑みこまれるのである。」

「今日の社会は、……。彼がまだ生きているうちに、老人をすでに時代おくれになった過去のなかに投げ込む。歴史の加速化は、年取った人間と彼の活動との関係を激変させた。かつて人びとは、年月の経過につれて経験という財宝が老人のなかに蓄積されると考えた……。それゆえ、不断の進歩の最終段階である老年は、人間存在の完成の頂点である、ということになる。しかし、実際には、人生はこのように展開するのではない。……。 / 4 5 1 / 人間存在は各瞬間ごとに自己を全体化するが、全体化はけっして完成されえない……。『われわれのある部分は硬化し、他の部分は腐る、われわれはけっして成熟しはしない。』……。われわれはものを覚え、そして忘れる。われわれは豊饒になり、そして破損するのだ。」

経験という概念。手工業者。知的な領域では、エリオは「教養とは、人がすべてを忘れてしまったときに、残るものである」と言った。残るもの、例えば、「一度学んだものを学びなおす能力、仕事を進める方式、過誤への抵抗力、危険防止の知恵、など。」 / 総合的視野。

4 5 2 / 「老いている者しかもてない経験がある、すなわち、老いそれ自身の経験である。」

「個人の生成は社会の生成のなかで行われるが、これと合致してはいない。このずれは、自分が生きている時代に必然的におくれてしまう老人にとって不利にはたらく。……」

個人は、投企（くわだて）がその新鮮さにおいて際限なく甦るこのリレー競争に従ってゆく力はない。彼は背後にとりのこされる。変化のさ中で、彼は同じままにとどまる。彼は時代おくれになる（失効する）ほかはないのだ。」

「知識の領域においては、彼は必然的におくれをとる。・・・相対的にいって私は一年ごとにより無知になる」　さまざまな活動をその独自性において考察しなければならない。

時代おくれの厄介者と見なされるのは、彼が社会の進化に介入しようと欲するかぎりにおいてである。消費者としては、違和感もなく、技術的進歩から利益を受ける。

「彼らの活動が問題に付されないかぎり、かれらを人類の全体からへだてるなんらの対立もない。・・・すばらしい見世物なのである。」

無為に暮らす高齢者の態度と、働いている人々の態度の間には、著しい対照。

453 / 耕作者の場合。 / 454 / 老いた職人、老いた商店主。 / 456 / 肉体的能力が大きく要求される職業では、・・・。

「彼らの生徒の進歩をとおして、自己超越性を保ちつづける。」

457 / 「肉体のもつ役割が重要であるにもかかわらず、老化現象がもつとも無理なく克服される職業は、ピアニスト、ヴァイオリニスト、チェリスト等、音楽の演奏家である。・・・そして、練習をやめないことが前提条件である。・・・」

知的労働者。 / 457 / 科学者。 / 467 / 哲学者。 / 471 / 作家たち。 / 478 / 音楽家たち。 / 479 / 画家たち。 / 784 / 科学者と芸術家との違い。 / 486 / 政治家の老年期
519 / 「死を前にした人間の態度は年齢によって変化する。」